

帝京科学大学教員



おすすめの本

どの本から
読んでみる?

CONTENTS

科学的探究・・・・・・・・・・・・・2

冲永 隆子 先生（医療福祉学科／総合教育センター／図書館長）

『AI と人間』

『この私が死ぬということ』

永沼 充 先生（顧問）

『言語の本質』

藤井 志帆 先生（こども学科）

『触楽入門』

金島 裕樹 先生（東京柔道整復学科）

『救急外来診療のフレームワーク』

永澤 巧 先生（アニマルサイエンス学科）

『なぜ猫はこんなにかわいいのか』

岩花 倫生 先生（アニマルサイエンス学科）

『かむ犬、うなる犬』

『愛犬の日本史』

学びへの糸口・・・・・・・・・・・・・8

酒井 理 先生（自然環境学科）

『ポケモン生態図鑑』

廣瀬 昇 先生（東京理学療法学科）

『FACTFULNESS』

生き方を考える・・・・・・・・・・・・・10

奥西 允 先生（医療福祉学科）

『無目的』

木村 龍平 先生（こども学科）

『スティーブ・ジョブズ』

柴山 雄大 先生（東京柔道整復学科）

『やり抜く力 GRIT』

松原 一誠 先生（柔道整復学科）

『嫌われる勇氣』

市ヶ谷 武生 先生（柔道整復学科）

『仕事をつくる』

宇佐美 健 先生（こども学科／教職センター）

『目的への抵抗』

青木 大 先生（総合教育センター）

『空気を読んではいけない』

坪川 祐美子 先生（学校教育学科）

『となりのためき』

社会を知る…………… 15

永沼 充 先生（顧問）
『シリアの家族』

佐野 徳雄 先生（理学療法学科）
『理不尽仕事論』

小山 優美子 先生（東京理学療法学科）
『移動する人はうまくいく』
『移動と階級』

渡辺 隆之 先生（アニマルサイエンス学科）
『コンテナ物語』

柴田 賢 先生（総合教育センター）
『決闘裁判』

いのちに寄り添う…………… 20

野崎 宏 先生（生命科学科）
『いのちの停車場』

大西 奈保子 先生（看護学科）
『空、はてしない青』

教育を見つめる…………… 22

佐藤 太 先生（教職センター）
『星の教室』

古川 雄祐 先生（医学教育センター/東京柔道整復学科）
『沈む日本とカオス化する世界』

持田 尚 先生（学校教育学科）
『冒険する組織のつくりかた』
『慶應大学生と学ぶ社会科教育』

文化と表現を楽しむ…………… 26

鈴木 幹夫 先生（作業療法学科）
『世界で最も美しい12の写本』
『虹の解体』
『砂の器』映画
『ミス・ペレグリンと奇妙なこどもたち』映画

藤井 志帆 先生（こども学科）
『だっぴ！』
『ワタナベさん』

福田 八重 先生（教職センター）
『あかね囃』

富岡 麻由子 先生（幼児保育学科）
『ギガタウン』

齋藤 正人 先生（幼児保育学科）
『歌川国芳』

歴史に親しむ…………… 30

仲光 秀城 先生（教職センター）
『真田太平記』
『戦国時代を変えた合戦と城』

近藤 保彦 先生（アニマルサイエンス学科）
『普天を我が手に』

稲川 健太郎 先生（教職センター）
『カズイスチカ』

科学的探究

AI を鏡に、 人間の責任を問う



医療福祉学科／総合教育センター／図書館長
冲永 隆子 先生



『AI と人間 知の責任について』
三宅善信著 集広舎 【請求記号：007.13/Mi76】

生成AIが文章を書き、画像をつくり、医療や教育の判断にも関わる時代に、私たちはAIをどこまで信頼し、どこからを人間自身の責任として引き受けるべきなのでしょう。

本書は、AIを単なる便利な道具として論じるのではなく、神話、聖書、神学、神道、生命論、メディア論を自在に往還しながら、「知ること」と「責任を負うこと」の関係を根底から問い直します。AIは膨大な情報を処理し、もっともらしい答えを示すことができます。しかし、迷い、苦しみ、他者の痛みに向き合い、結果を引き受けることまでAIに委ねてよいのでしょうか。

技術の進歩を恐れるのでも、無条件に礼賛するのでもなく、AIを鏡として人間とは何かを考える一冊です。専門分野を越えて読める平明な語り口も本書の魅力です。AIと共に生きるこれからの社会を担う学生の皆さんに、ぜひ手に取ってほしいと思います。

『この私が死ぬということ 人文死生学の展開』
浦田悠 [ほか] 執筆 春秋社 【請求記号：114.2/U84】

「自分の死」を知ることはできるのか。

本書は、この根源的な問いを、人文死生学という学際的な視点から考え抜く論集です。私たちは日々、他者の死に触れながら生きています。しかし、自分自身の死だけは経験の外にあり、他者の死と同じようには捉えられません。

本書は、死生心理学、時間論、反出生主義、科学的世界観、異世界転生、終末期の意思決定など、多彩なテーマを通して、「私の死」の固有性と、その語りがたさに迫ります。私も終末期の意思決定と尊厳死をめぐる問題を論じ、哲学的な死の問いを医療や生命倫理の課題へとつなぐ一章を担当しました。

死について考えることは、生を暗くすることではありません。限りある生を、誰と、どのように生きるのかを見つめ直す営みです。専門の異なる執筆者たちの議論が響き合い、安易な答えに回収されない深い思索へと導いてくれます。人生の節目に繰り返し開きたくなる一冊です。

「私の死」から、
生を問い直す



顧問

永沼 充 先生



『言語の本質 ことばはどう生まれ、進化したか』

今井むつみ, 秋田喜美著 中央公論新社 【請求記号：801/I43】

生成 AI の基幹技術である LLM（大規模言語モデル）は、その名の通り言葉（記号）同士の確率的な関係を計算処理しているだけなのに、なぜ人間の様に答えを返してくるのだろうかと疑問に思っていた。ちょうどその時、オノマトペから始まり、子どもの言語習得過程、言語の進化まで論じた本書を手にして早速購入した。270 ページほどの新書であるが、動物が言語を持たないことまで考察した読み応えのある内容である。

オノマトペは「ふらふら」「ぶらぶら」「ぷらぷら」のような音象徴言語である。感覚イメージを写し取っているので、言語体系が異なっても言葉が示す内容は伝わる。一方、「いぬ」は恣意的に作られていて、英語話者には何のことを言っているか分からない。オノマトペは清音、濁音、半濁音で異なるイメージを写し取る。例に挙げた 3 つのオノマトペでは「ふらふら」より「ぶらぶら」の方が質感が重い。赤ん坊は言語体系が未熟でも音象徴として意味が埋め込まれているオノマトペを通じて言語を習得できる。一方、「うごく」という言葉は他の言葉との組み合わせで意味を習得していかねばならない。

言語を獲得していく過程で推論という思考過程が重要であることを著者は述べている。特に、帰納推論とアブダクション推論については紙面が割かれている。帰納推論は起こった事象に対し共通するルールを見出すのに対し、アブダクション推論は原因（仮説）を思いつくという逆の方向性をもつ。動物でも帰納推論をしていることは実験により確かめられているが、アブダクション推論については証拠がない。一方、人間は言葉を覚える段階から両方の推論ができてること（双方向推論）が視線観察の実験により確かめられている。人類が言葉を獲得したのに対し、動物が言葉を持たない理由として考察されている。

人類は 700 万年前にサルから枝分かれし、7 万年前に言葉を、7 千年前に文字を生み出した。70 年前には言葉を記号として操る実用的なコンピュータが開発され、7 年前の ChatGPT2 公開により AI 時代に突入した。著者があとがきで記している様に、本書は「言語の本質とは何か、人間の思考の本質とは何かを考える長い旅」の伴でもある。

オノマトペから始まる 人間探求の長い旅路



触覚から見つめる、 ものの本質



こども学科
藤井 志帆 先生



『触楽入門』 はじめて世界に触れるときのように』
テクタイル著 朝日出版社 【請求記号：141.24/Te31】

私たちは、日常の多くの情報を視覚から得ています。ものの形や色、表情、距離、周囲との関係など、目に映るものを手がかりに、ものごとを理解しているように感じます。しかし、見えているものが、必ずしもそのもののすべてを表しているとは限りません。光や角度、距離、見る人の経験によって、ものの見え方は変わります。『触楽入門』は、触覚を手がかりに、私たちが世界をどのように感じ、捉えているのかを、科学や技術、アートなど多様な視点からひもとく一冊です。

私はやきものを素材に、「不確かさ」をテーマとした造形表現を行っています。制作において「触れること」は、形をつくるための手段であるだけではありません。粘土の柔らかさや重さ、温度、湿り気、指先に返ってくる抵抗を感じながら、素材の状態を確かめ、自分の感覚や記憶、思いと向き合う行為でもあります。さらに、成形した粘土は乾燥や焼成を経ることで、柔らかく可塑的なものから、硬さや重さ、表面の質感を備えたやきものへと変化します。焼成前後では、手触りだけでなく、ものとしての存在感も大きく異なります。その変化は、制作者がすべてを思いどおりに支配できるものではなく、土や火、時間との関わりの中で生まれるものです。そこにもまた、私が向き合っている「不確かさ」が存在しています。

目で見るだけでは捉えきれず、触れることで初めて立ち上がる記憶や想像があります。ものに触れ、確かめようとすることは、その本質に近づこうとする一方で、それが決して一つではないことにも気づかせてくれます。本書は、普段意識することの少ない触覚の豊かさをあらためて感じさせ、世界との関わり方を少し揺さぶってくれます。読む人それぞれが、自分の手や身体の手触りを通して、身近なものとの関係を見つめ直すきっかけになるのではないのでしょうか。触れることで見えてくるもの、そして、確かめようとするほど広がっていく感覚の面白さに出会ってほしいと思います。



東京柔道整復学科
金島 裕樹 先生



『救急外来診療のフレームワーク』

簡単に帰してはいけない患者 Bounce-back Admission 事例分析の極意
垂水庸子著 中外医学社 【請求記号：492.29/Ta91】

今回、私が紹介するのは医学書です。「見出し」としては「救急外来診療にかかわるすべての方へ」としましたが、医療安全の視点から、全ての医療従事者に読んで頂きたい書籍です。

皆さんは「Bounce-back Admission (以下 BBA)」って聞いたことがありますか？ BBA とは（患者の）帰宅後まもない予定外入院＋死亡のことです。本書では、実際にあった BBA の事例をもとに「診療エラー」による BBA をできる限り回避し「命を救えるタイミング」での BBA にするためにはどうすべきかを診療のプロセスごとに検討し、理想的な行動の枠組み＝フレームワークを構築しています。

医療事故の予防には、事例をもとにしたリスクの特定や改善点の検討が有効であることは、複数の研究により明らかにされています。1999 年、米国では Institute of Medicine が報告書『To Err is Human』を発表しています。この報告書では、患者が死にいたってしまった医療事故のうち、およそ 44,000～98,000 人（米国全土／年間）は回避可能であったと述べています。そして『To Err is Human＝ひとは誰でも間違える』ことから、事故の責任を個人に負わせるのではなく、システムにより事故を防止する必要があるという提言がなされています。

著者は「本書を通じて、BBA 事例を抽出し分析する仲間の輪が広がり、つながり合う機会となれば…」とも述べています。私も「仲間の広がり」は、情報を共有できる機会の増加にも繋がると考えています。事例に対してプロセスを追って評価し、多職種の医療従事者間で情報共有が可能になれば、安全性の向上に有益となります。本書は、救急診療の指南書として学べるだけでなく、生涯にわたり学び続けていくことの必要性を再認識させてくれる蓋然性の高い一冊です。

最後に、著者・垂水庸子先生は、救急診療をご専門とされ、臨床のみならず、教育の現場においても御活躍されています。また、東京オリンピックでは、有明アーバンスポーツパークの会場医療責任者をつとめられておりました。私は、垂水先生のもとでメディカルオペレーションマネージャーとして活動し、その間、数多くの貴重な学びの機会を頂きました。臨床現場を共にさせて頂いたものとしても、自信をもっておすすめしたい一冊です。

救急外来診療に かかわるすべての方へ



東京オリンピックの自転車競技（BMX レーシング）終了後、スタート地点で著者・垂水先生と一緒に撮っていただいた写真です。後ろに見えるのはコース、そしてともに活動した大切な仲間たちです。

猫の「なぜ？」を 科学で解き明かす一冊



アニマルサイエンス学科

永澤 巧 先生

『なぜ猫はこんなにかわいいのか 100の疑問が解き明かす』

CAMP NYAN TOKYO 監修 ONDORI 【請求記号：645.7/Ky6】

犬と猫を比べると、2014年以降、日本では猫の推計飼育頭数が犬を上回っており、現在も約900万頭の猫が人と暮らしている。私自身も一頭の猫と生活しているが、折に触れてふと思うことがある。「あれ、猫って少しかわいすぎないか？」と。SNSをのぞけば、今日も多種多様な猫の動画があふれ、コメント欄では、そのかわいさがありとあらゆる言葉で表現されている。

実は、猫をかわいいと感じる理由の一部は、学術的な視点から説明できる。丸い顔、大きな瞳、小さな鼻や口といった特徴は、人や動物の赤ちゃんにみられる「ベビースキーマ（幼児図式）」に通じる。こうした特徴は、見る者に「守りたい」「世話をしたい」という感情や行動を引き起こしやすいとされる。そして興味深いのが、猫には、成長後も幼い印象を与える顔立ちがみられるうえ、人に向かって鳴く、喉を鳴らす、接触を求めるなど、飼い主の心をつかむ行動も多い。見た目だけでなく、行動まで私たちの養育行動をくすぐるのである。

本書『なぜ猫はこんなにかわいいのか 100の疑問が解き明かす』は、「なぜ箱を見るとすぐに入るのか」「なぜゴロゴロと喉を鳴らすのか」「なぜ高い場所にのぼりたがるのか」など、猫好きなら一度は抱いたであろう100の疑問を、Q&A形式で楽しく読み解く一冊である。監修を担うのは、猫への深い愛情と科学的な視点をあわせ持つ研究者集団「CAMP NYAN TOKYO」。一つひとつの項目が簡潔にまとめられているため、気になる疑問から自由に読むことができる。

私自身も監修者の一人として参加したが、執筆・監修の過程を通じて、猫という動物の奥深さと魅力を改めて実感した。家族同然の猫に健康で長く、幸せに暮らしてほしいと願うなら、「この猫は何を感じ、なぜこの行動をするのか」と問い続けることが大切である。猫の行動を単に「かわいい」「不思議」で終わらず、その背景にある身体の仕組みや習性を知ること、猫の感じ方を尊重し、よりよい関係や飼育環境を考えることにもつながる。猫と暮らしている方、これから猫を学びたい方、そしてすべての猫好きの知的好奇心を満たしてくれる、おすすめの一冊である。

アニマルサイエンス学科
岩花 倫生 先生



『かむ犬、うなる犬 犬たちが傷ついた犬を癒していく』
太田京子著 岩崎書店 【請求記号：645.6/O81】

『愛犬の日本史 柴犬はいつ狆と呼ばれなくなったか』
桐野作人、吉門裕著 平凡社 【請求記号：645.6/Ki54】

1か月の間に何冊の本を読みますか？ スマホがあれば、知りたい情報をすぐに調べられる時代になりました。しかし、断片的な情報を得ることと、一つのテーマを深く理解することは異なります。読書は、著者の考えや経験をたどりながら物事を多面的に捉える力や、自分の考えを論理的に伝える力を養ってくれます。実際、就職活動では知識の量だけでなく、考察の深さや表現力が問われます。本を読んできた人は、面接や文章作成の場面でその違いが自然と表れます。小説やエッセイ、社会問題に関する本にも触れ、人と動物の双方を理解できる豊かな視野を育ててほしいと思います。読書は、皆さんの将来の大きな財産になるはずです。

さて、最初に紹介するのは太田京子さんが書かれた『かむ犬、うなる犬：犬たちが傷ついた犬を癒していく』です。この本は、「かむ」「うなる」といった問題行動を示す犬たちが、どのような経験や不安を抱えているのかを見つめ直し、その回復の過程を描いています。犬の攻撃的な行動を単なるしつけの問題として捉えるのではなく、心や環境との関わりから理解しようとする姿勢が伝わってきます。また、犬同士の関わりが傷ついた犬の心を癒していく様子は、動物が持つ社会性や行動の奥深さを考えるきっかけになります。犬の行動をより深く理解し、動物と人とのより良い関係について考えるきっかけになります。

桐野作人さんと吉門裕さんが書いた『愛犬の日本史』は、日本人と犬がどのような関係を築きながら歴史を歩んできたのかを紹介します。戦国、江戸、幕末、明治、大正、昭和の時代背景と犬との関わりが記述されています。狩猟や番犬としての役割から、家族の一員として愛される現代の伴侶動物へと至るまで、犬と人との関わりの変化を歴史的な視点から学ぶことができます。犬の飼育文化や社会的な位置づけが時代とともにどのように変化したのかを知ることで、現在の動物福祉や人と動物の関係についても深く考えられます。犬と人の長い共生の歴史に触れて頂きたいと思います。

犬を知る！



学びへの糸口

誰もが妄想した
ポケモン達の世界を
リアルに描写



自然環境学科
酒井 理 先生



『ポケモン生態図鑑 Pokécology』
株式会社ポケモン著 小学館 【請求記号：798.5/P76】

本書は、架空の生物ポケットモンスター（通称ポケモン）を行動生態学の視点から読み解き、人気を博している一冊だ。

ポケモン黎明期に小学生時代を過ごした私は、当時その世界観に浸り、彼らの生き様に妄想を膨らませていた。今や世界的なコンテンツとなったポケモンは、単なるエンタメの枠を超え、科学界へ与えた影響も高く評価されている。学術誌『Nature』が誕生 30 周年特集を掲載したことも記憶に新しく、作中での収集や分類の体験が生態学のフィールドワークと通底し、多くの若者が科学者を志す契機になったと評価している。さらに、本書の印税の一部は実際の動物行動学研究へと寄付されるという。海洋動物の研究で博士号を取得し、科学イラストレーターとして活躍する著者ならではの、粋な学術貢献と言えるだろう。本書を通してあの頃の好奇心を呼び覚まし、今度は実際の研究活動へと繋げてほしい。

ゆめと ぼうけん！ ポケットモンスターの せかいへ レッツ・ゴー！



東京理学療法学科
廣瀬 昇 先生



『FACTFULNESS』

10の思い込みを乗り越え、データを基に世界を正しく見る習慣』
ハンス・ロスリング[ほか]著 日経 BP 社 【請求記号：002.7/R72】

私たちは、ときに「事実」そのものよりも、強く印象に残った経験に判断を左右されることがあります。

たとえば医療の現場では、ある治療によって劇的に改善した患者を目の前にすると、「この治療は、ほかの患者にもきつと有効だ」と考えたいくなります。しかし、一つの成功例だけで治療の効果を判断することはできません。本来は、どのくらいの症例数で検討されたのか、比較対象はあるのか、どのような特徴をもつ患者が対象だったのか、そして効果はどの程度だったのかを、客観的に確認する必要があります。

今回おすすめする書籍『FACTFULNESS』は、このように印象的な経験や思い込みだけにとらわれず、データや根拠をもとに全体像を捉えることの大切さを教えてくれる本です。

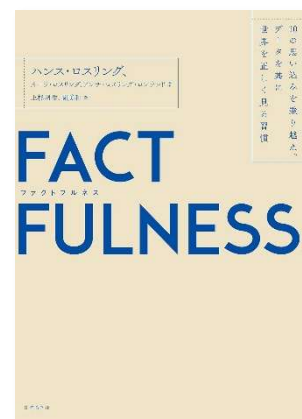
ただし、本書に掲載されている統計の一部は、出版後も変化し続けています。また、「世界は改善している」というメッセージだけを強調して受け取ると、現在も残る格差、紛争、環境問題などを軽視することにもつながりかねません。そのため、書かれている数値や主張をそのまま覚えるのではなく、「その情報は今も正しいのか」「別の見方はないのか」と考えながら読むことも大切です。

この本の魅力は、世界の統計を暗記できることではありません。むしろ、「自分が常識だと思っていることは、本当に事実なのか」と問い直すための方法を学べる点にあります。

ニュースを見るとき、SNSの情報に触れるとき、授業で新しい知識を学ぶとき、そして将来、専門職として判断するときにも、この姿勢は大きな助けになります。自分の思い込みに気づき、根拠を確認し、物事を一つの側面だけで判断しないための入り口として、大学生のうちに一度は読んでほしい一冊です。

私自身も、判断に迷ったときや、自分の考えに偏りがあると感じたときに、この本を読み返しています。

その印象、
ほんとに正しい？



生き方を考える

医療福祉学科
奥西 允 先生



『無目的 行き当たりばったりの思想』
トム・ルッツ著 青土社 【請求記号：104/L97】

今を生きる方法を
体験したい人へ



トム・ルッツは、現代社会をどう生きていくのかを真剣に考えている人の一人だと思う。彼の最近の著書（訳書）である『無目的―行き当たりばったりの思想―』は、以下のような魅力的な言葉が散りばめられている。

芸術や、生活や、文章や、思想や、存在において、無目的性は常に、それが意味する欠如よりも、豊かである。（7 頁）

つまり、無目的であることは、「善い」ことなのだ。ただ、現代社会では、合目的であることが称賛される。というのも、目的を定めて、その目的を達成するために行動するほうが、効率的で生産的だからである。受験勉強を頑張って大学に入学したと思ったら、キャリアデザインという名のもとに、「では将来どうするか」を考えさせられる。今、何かしていることはそれ自体で価値のあるものではなく、目的から逆算して、価値が決められる。「将来役に立たないから必要ない」といった、人々が頻繁に使用する陳腐な台詞は、私たちの思考が、合目的であることに侵されている証ではないだろうか。

それに対して、無目的であることは、「今、ここ」に集中することを教えてくれる。私たちは子どもだったとき、「今、ここ」に集中し、全力で生きていた。だからこそ、一日はあれだけ長く充実したものだったのではないだろうか。しかし、私たちは大人になるにつれて、子どもであることを忘れてしまったし、無目的であることが困難になってしまった。

でも大丈夫。本書は、その読書体験を通して、無目的であるための具体的な How To まで教えてくれる。読書は、ある目的のために何かを知ったり、学んだりする行為であると考えられがちだが、そうではない。いや一般的にはそうなのかもしれないが、最低限、それだけではない。読書は、本を通して、今を生きるための技法でもある。本を読み、悪戦苦闘しながら考え、メモを取り、時には部屋の中をぐるぐるする。気がつくと、時間があっという間に経っている。今を生きる技法として本を読むためにはどうすればよいのか、本書を通してぜひ「体験」してほしい。特に本の読み方が分からない人に、一読をおすすめする。

こども学科
木村 龍平 先生



『スティーブ・ジョブズ』

ウォルター・アイザックソン著 講談社 【請求記号：289.3/J56/1～2】

学業や仕事に、そして日常生活でパソコンやスマートフォンを当たり前のように使っています。しかし、私が学生の頃は卒業研究でようやく触れるようになり（太陽電池の特性を測定する測定装置として）、社会人になってからは「国民機」と評された NEC の PC-98 を使うようになりました。その頃は MS-DOS ベースのコマンドラインから命令を打ち込んで使うというものでした。1998 年に「Windows98」がリリースされるのを前に、これを使うには大幅なハードウェアへの追加投資が必要ということが分かり、であれば、同じ予算をかけて当時、少しおしゃれな印象をもっていた Macintosh（いわゆる Mac）にのりかえました。

Mac はシリコンバレー成功物語の申し子；Microsoft のビル・ゲイツと同時代のスティーブ・ジョブズが設計し実用化したパソコンです。最近では「電話を再発明する！」とあって登場させた iPhone はよく御存じですね。

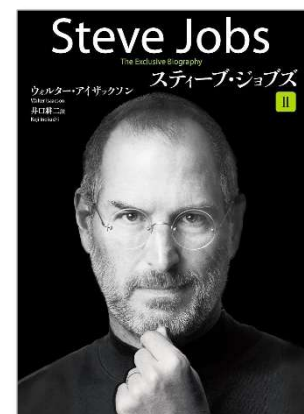
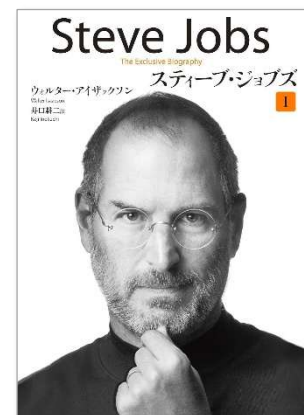
Mac にしろ iPhone にしろ、彼は新しい技術を研究開発したのではなく、既存技術（液晶表示やインターネット等）を組み合わせ、誰も考えつかなかった機能を製品化してイノベーションを起こした人です。当時、半導体材料の一研究者であった私には大変魅力的な人物に映りました。一体彼はどのような人なのかと思い、今回ご紹介する本を手にとり読み始めました。

物作りに対する妥協を許さない徹底的なこだわり、彼に凝視された者は思考停止に陥り動けなくなる；彼の周囲は時空が歪んでいる とまで言われた強烈な個性をもち、ベジタリアンであり、若い頃はインドでしばらくの間、こもっていた…。そのため彼を取り巻く人間関係は長続きせず、自身が創業した会社（アップル・コンピュータ）も追い出されました。しかし彼のいなくなった会社の製品は魅力が薄れてしまい経営が傾きました。請われて戻ってくると暫定 CEO（interim CEO）に着任し、この肩書きがとても気に入、頭文字を取った製品（iMac、iPod、そして iPhone に iPad）を次々と開発&発売、会社を建て直しつつ世の中を変えていきました。

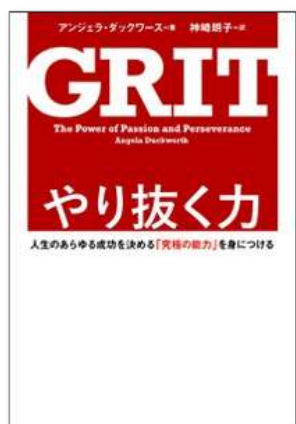
そんなこんながひもとかれているのが本書（2011 年発売）です。

この本は分厚く重たいのですが、現在は Amazon から Kindle 版（電子書籍）を入手することができます。古本屋で時々本を見かけます。著者はウォルター・アイザックソンです。本書以外にも様々な人物の伝記があります。比較的新しいところでは『イーロン・マスク』がありますね。これも時間ができたら読んでみたいと思っています。

世の中を変えた男 スティーブ・ジョブズ



特別な才能はいらない。
必要なのはやり抜く力。



東京柔道整復学科
柴山 雄大 先生



『やり抜く力 GRIT』

人生のあらゆる成功を決める「究極の能力」を身につける』

アンジェラ・ダックワース著 ダイアモンド社 【請求記号：159/D93】

大学生活やこれからの人生において、最も未来を切り拓く武器になる力。
それが「GRIT（グリット）」です。

これは、一歩踏み出す Guts（度胸）、逆境から立ち直る Resilience（回復力）、自ら動く Initiative（主体性）、そして泥臭く続ける Tenacity（粘り強さ）の4つの頭文字を指します。

世界的企業のCEOやトップアスリートはGRITの値が高い傾向にあると研究で報告されており、すべてが生まれつきの才能で決まるわけではありません。「正しいやり方で、ひたすらやり続ける」ことで、誰でも後天的に鍛えられるスキルです。

大学生活では、学業や留学、サークル、就活など「思い通りにいかない壁」に必ず直面します。その時、才能のせいにして諦めるか、GRITを発揮して這い上がるかで、卒業後のキャリアや10年後の人生は180度変わります。「やる気はあるけれど、どうやって頑張ればいいのかわからない」と悩む学生にこそ本書を手にとってもらい、理想の自分に一歩近づく転機に生まれたいと思います。

柔道整復学科
松原 一誠 先生



『嫌われる勇気』

岸見一郎、古賀史健著 ダイアモンド社 【請求記号：146.1/Ki58】

本書は哲人と青年による対話形式で構成されており、アドラー心理学の考え方をわかりやすく伝えています。内容の中心には、「世界はシンプルであり、人生もまたシンプルである」や「人は変われる」という考えがあります。また、悩みや生きづらさが、自身を取り巻く環境ではなく、自らの選択として捉えるなど独特の視点が示されています。

特に印象に残ったのが「本当の自由とは何か」という問いでした。他者からの承認や評価を求めることと「自分らしく生きる」ことが同じ方向であるのか考えさせられました。

大学生になると自身で考え行動していくことが求められます。そこから、他者からの評価を意識し行動が変化するのではないのでしょうか。本書は自身の人生や人との関わり方を見つめ直すきっかけになりうる図書だと思います。様々な考え方の一つとして手にとってみてはどうでしょうか。

「自分らしさ」とは・・・



不撓不屈の世界的建築家 安藤忠雄の生き方



柔道整復学科
市ヶ谷 武生 先生



『仕事をつくる』

安藤忠雄著 日本経済新聞出版社 【請求記号：523.1/A47】

学歴も社会的基盤もなし。あるのは情熱だけ。プロボクサーから独学で建築学を勉強し、世界的建築家になった男——安藤忠雄。

彼の言葉はとにかく熱い。挑戦的で鬱陶^{うっとう}しいほどの情熱みなぎるメッセージは、日本と若い人々に向けた叱咤激励にあふれている。しかし読み進めていくと、この叱咤激励が実は安藤自身にも向けられていることに気づく。そう、安藤自身も常に自分を鼓舞させながら生きているのだ。書中には安藤の建築写真もあり、目を楽しませてくれる。

自分は何者？ 今をどう生きるか、将来への漠然とした不安……。悩みや迷いは十人十色だが、結局は自分の人生を生きる中で解答するしかないのだろう。現在では理解に苦しむ考えも含まれているかもしれないが、世界を相手に桁外れの実績を挙げた個性的な建築家の話に耳を傾けてみるのも時間の無駄ではないだろう。

こども学科／教職センター
宇佐美 健 先生



『目的への抵抗』

國分功一郎著 新潮社 【請求記号：104/Ko45】

現代の教育は「資格取得のため」、「就職活動のため」などのように、あらゆる行為に明確な目的を求めがちです。世の中でも「タイパ」や「コスパ」のように効率を求める風潮が強まっています。

しかし、ちょっと待ってください。「目的」や「効率」って、本当にそれほど大事なものののでしょうか。

哲学者・國分功一郎氏の『目的への抵抗』は、社会全体が無意識に前提としている「行為には目的があるべき」という認識自体を疑います。行為に目的があるべきならば、目的に合わない行為は「役に立たないもの」あるいは「非効率なもの」として片付けられてしまうことになります。

それは、本当に望ましいことなのでしょうか？ むしろ、一見役に立たず非効率に思える時間や行為の中にこそ、人間の自由や思考の深まりがあるのではないでしょうか？

今のあなたは、「～のため」という目的から離れて、ただ何かに没頭し、ただ何かに夢中になることができますか？

今、あなたは
学びに夢中に
なれていますか？



「空気」に流されない 生き方



総合教育センター
青木 大 先生

『空気を読んではいけない』
青木真也著 幻冬舎 【請求記号：789/A53】



「空気を読む」ことが美德とされる日本社会に対し、「本当にその空気は読むべきものなのか」という問いを投げかけてくれる一冊です。

著者の青木真也氏は、総合格闘家として世界の舞台上で活躍する一方、周囲の評価や常識に流されることなく、自らの価値観を貫いてきました。本書では、自分の頭で考え、他人の期待や世間の「当たり前」に振り回されず行動することの大切さが、率直な言葉で語られています。

大学生活では、友人関係や部活動、進路など、多くの場面で周囲の意見や雰囲気の影響を受けることがあります。しかし、大切なのは空気に合わせるのではなく、自分自身で考え、納得した上で選択することです。

私自身、学生の指導に携わる中で、「自分の軸を持ち、自ら考えて行動できる人」が大きく成長していく姿を数多く見てきました。固定観念にとらわれず、自分らしい生き方を考えるきっかけとして、多くの学生に読んでほしい一冊です。

学校教育学科
坪川 祐美子 先生

『となりのたぬき』
せなけいこ作・絵 鈴木出版 【請求記号：726.6/Se57】



「となりの たぬきが きらいだ。どこか とおくへ ぶっとばしたい！ きらい きらい だいきらい！」いじわるなたぬきが大嫌いなうさぎ。ある日、お月様にたぬきをやつけてもらう代わりに、うさぎはお月様と、ある約束をしました。すると次の日から…。

見開き 10 ページちょっとのやさしい絵本です。相手の態度や気持ちを変えることは難しい。けれど、何かのきっかけや強い意志があれば、自分が変わることはできるかもしれない。自分が変わると、もしかしたら、世界が何か変わってくるのかもしれない。教育人間科学部の皆さんが将来、学級の子もたちへ読み聞かせるのはもちろんのこと、それ以外の皆さん自身にも、一度読んでみてほしい一冊です。

なぜ、たぬきはうさぎを嫌っていたのでしょうか。なぜ、最後にうさぎは泣いていたのでしょうか。大人が読んでも、何か大事なことに気づかされ、考えさせられる一冊だと思います。

まずは自分から、
勇気を出して



社会を知る

顧問
永沼 充 先生



『シリアの家族』

小松由佳著 集英社 【請求記号：302.275/Ko61】

アラブの大家族に脈打つ 人と人の絆



アサド政権下で獄死した義兄が秘密警察に連行されることからこの物語は始まる。物語と言ってもドキュメンタリー写真家である著者の眼を通して見た事実である。2011年のアラブの春に触発された民主化運動から、2024年12月の政権崩壊直後までの、シリアの普通の人々の生活が内側（著者の夫ラドワンはシリア難民）から描写されている。「故郷（ワタン）とは人間が持ちうる最上のものである」というアラブの格言を、内戦下の生活を交えて物語風に紐解いていく。世界文化遺産都市パルミラを軸に、義父ガーセムを家長として強いきずなで結ばれた一族をドキュメンタリー風に追う。著者の夫は16人兄弟姉妹の12男である。パルミラはISと政府軍の交戦により破壊された。一族はトルコに逃れ、そこで義父は没す。

家族制度、宗教、女性観など近代化が進んだ日本では実感することが難しい内容であるが、読み終わって「遅れている」と感じさせない人と人の触れ合いが随所にみられる。ジェンダーフリーの対極にあるこの国の内戦状態の現場に女性一人で出かけていく強さはどこから来るのか？ 著者は日本人女性で初めてK2（8,611m）に登頂している登山家でもある。悪天候のヒマラヤで一瞬の判断が生死を分ける状況と、秘密警察と対峙する瞬間は同じかもしれない。一方、荒廃した内戦下のシリアでも携帯が通じることは新鮮な驚きでもある。中東の戦争状態はすでに7か月が過ぎ、世界経済を大混乱に巻き込んでいる。9,000km先の国家間の争いとして眺めるだけでなく、文化的背景を理解する上で本書は役に立つのではないかと考え推薦する。

本書に現れる人物の相関図と年表、訪れた場所を記した地図が人々の写真とともに巻頭に添えられている。開高健ノンフィクション賞受賞作。



理学療法学科
佐野 徳雄 先生

『クソが!!』と思った時に
読む本（著者談）



『理不尽仕事論 「クソが!!」と思った時に読む本』
坂井風太, ぐんぴい著 文藝春秋 【請求記号：159.4/Sa29】

本書は、お笑い芸人のぐんぴい氏と坂井氏によるラジオでの対談をもとに構成されており、心理学や組織論、人材育成に関する数多くの研究知見に触れることができます。

仕事や人間関係のなかで、「なぜうまくいかないのか」「自分の努力が足りないのか」と悩むことがあると思いますが、そのような経験を個人の資質だけに帰属させません。生存者バイアスやロールモデルストレスといった概念を通して、多くの人が同じような葛藤を抱えてきたことを教えてくれます。

本書の魅力は、理不尽さを「よくある話」と突き放すのではなく、言葉によって理解可能なものにしてくれる点にあり、自分自身の経験を少し離れたところから見つめ直すことができます。

理不尽さはなくなりません。しかし、自分だけの問題ではないと知ること、前に進むための力になります。進路や働くことについて考えている学生に、ぜひ読んでほしい一冊です。



東京理学療法学科
小山 優美子 先生



『移動する人はうまくいく』

長倉顕太著 すばる舎 【請求記号：159/N14】

『移動と階級』

伊藤将人著 講談社 【請求記号：361.8/I89】

人生を変えたいとき、どうしたらよいのか？ なぜ人は変わりたいと思いつつも、その場に留まり続けているのか？ 長倉顕太著『移動する人はうまくいく』は多くの人が一度は悩み考えることに對し、シンプルな解決策を提示します。移動すれば、環境を変えればよい、と。

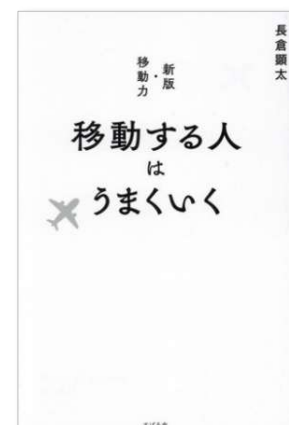
著者は「環境→感情→行動」の順に人生が決まていく、と移動の重要性を説いていきます。本書でいう“移動”とは、移住や旅行だけでなく、普段行かない場所へ行ってみる、新しいコミュニティに参加する、初めてのアルバイトに挑戦するなど、日常から一歩踏み出す行動すべてを指しています。身近な場所から一歩外に出てみることに、いつもと違う環境に身を置くことの大切さが、本書を通じてわかるでしょう。そして移動できることとは、環境を選択できることに他なりませんし、選択肢の多さこそが人生の豊かさであるということには大いに共感させられます。

その一方で、読んでいる最中から、こんな心の声が聞こえてきそうです——そんなに簡単に移動できれば苦労しないって...——。そうです、移動とは簡単ではないのです。

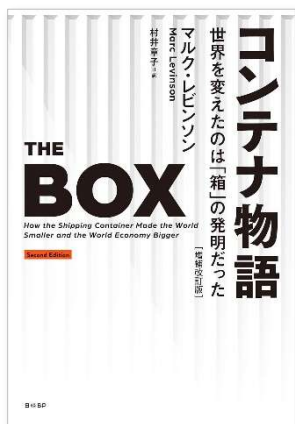
そこで手に取ってほしいのが伊藤将人著『移動と階級』です。本書は、社会学の視点から「移動」の格差を読み解いていきます。移動は本人の意欲だけではなく、家庭環境や経済状況、地域など、さまざまな条件に左右されます。そして、世界では「移動できる人」と「移動できない人」、あるいは「自ら移動する人」と「移動させられる人」の分断が確実に広がっていることが、本書を通じてわかります。努力だけでは語れない社会の現実を知ること、自分とは異なる背景をもつ人への理解や、誰もが挑戦できる社会とは何かを考えるきっかけになるでしょう。

一冊は皆さんに「まずは動いてみよう」と思わせ、もう一冊は「誰もが移動できる社会になっているだろうか」と問いかけます。学生の皆さんにはぜひ二冊をあわせて読み、「移動」という身近なテーマを通して、自分の未来と社会の未来の両方に思いを巡らせてほしいと思います。

“移動”について考える
—移動が変える人生と
移動から見える社会—



世界的大発明が
ただの鉄の
箱だった？！



アニマルサイエンス学科
渡辺 隆之 先生



『コンテナ物語 世界を変えたのは「箱」の発明だった』
マルク・レビンソン著 日経 BP 【請求記号：681.6/L57】

2019 年、コロナが出る少し前にアマゾンの紹介のところにあがっていたので、英語のタイトルを見ただけで内容も何も考えずにポチっとなと購入ボタンを押していました。「THE BOX」です。箱？ そこで和名タイトルを見てコンテナの話かと理解しました。すぐに BOX を英和辞書で調べてみました。特にコンテナの意味にはコンテナボックスとはありませんでした。読み手に関心を持たせるためのタイトルテクニックに私はまんまとひっかかったのかと理解しました。

本書は 2006 年に書かれたので古い本ではありますがアメリカでベストセラーになった本とのこと。著者は経済学者で内容が重い経済の話かと思っていたのですが、そんなにたくさんの数字は出てきませんでした。この本書の登場人物で一番の功労者はトラック運転手のマルコム・パーセル・マクリーンという男です。彼がコンテナ輸送を確立した人物で、この本の主人公です。アメリカンドリームを手にした人物です。実在した人物でもあり彼の成功と栄光と挫折、そして華麗なる復活といった波乱万丈の人生がわかります。コンテナの発明が世界の流通を変えたというのは本当に驚くべき事実です。コンテナボックスがグローバル経済に影響を与えたのだという骨子を元にこの本は描かれております。経済学者の書いた本なので引用文献がすごい数です。これもこの本の特徴かなと思っております。新型コロナの流行が日々深刻化する中、唯一、私の心の中に沁み込んでいった一冊になりました。ただの金属でできた大きな箱が世界の流通を大きく変えたのですから。

ただ、コンテナに関しては闇の部分も存在していることを知っておかないといけません。工場からコンテナに入れられた荷物はそのまま金属の箱に入ったままクライアントに届きます。すごく便利なのですが密輸業者などはこの裏を突いてくるのです。記憶に新しい事件で中国で作られた合成麻薬フェンタニルが名古屋港を経由してアメリカに輸出されていたという事件です。コンテナの箱の中身を調べないということが露呈した事実でもあります。

総合教育センター

柴田 賢 先生



『決闘裁判 ヨーロッパ法精神の原風景』

山内進著 筑摩書房 【請求記号：322.3/Y46】

裁判にはどんなイメージがあるでしょうか？

生真面目な法律家が難しい言葉を使ったり、「異議あり！」と言ったりして、真実を証明する厳粛な法廷が想像されるかもしれません。それは暴力と真逆のイメージです。

一方、決闘とは、己の名誉のために生命を賭けて一対一で闘うことです。くだけた言い方をすれば「タイマン」で物事を決めるということです。

決闘と裁判——二つの言葉は対極にあるように思われます。しかし、西ヨーロッパの歴史における決闘と裁判の興味深い関係を実証的に描いたのが、『決闘裁判』です。

私たちはトラブルに巻き込まれたとき、裁判を起せば裁判所が調べて解決してくれる、と思ってしまいがちです。ただ実際には、裁判所がそこまでサービスしてくれるわけではありません。

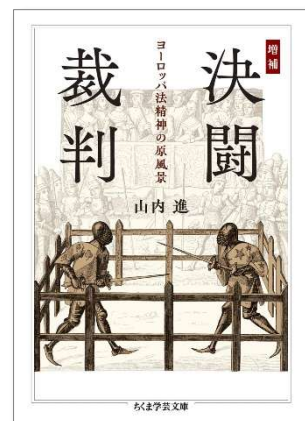
法律を調べて法的主張をするのも、あちこち歩きまわって証拠を集めるのも、裁判を闘うその当事者の仕事です。とても骨の折れる仕事です。勝ち負けは、基本的に自分の手にかかっているのです。訴訟で何を主張し、何を証拠として提出するかを当事者が決めるというルールを、法学では「当事者主義」といいます。

著者は、決闘によって名誉の証明や紛争の解決を行う中世ヨーロッパの「決闘裁判」が、現代の裁判における当事者主義に通じていると論じています。たしかに、決闘は自身の運命を他の誰かに委ねないという意味で、現代の裁判に似ているところがあります。

大昔の社会にはさまざまな裁判がありました。例えば、熱湯に手を入れて火傷しなかった者は正しいとされる「熱湯裁判」などです。これらは、神の裁きとして人々に受け入れられていたようです。決闘裁判も、もともとその一種でした。しかし、そのなかで決闘裁判だけが長い間続いたようです。その理由は、決闘が自分の自由や名誉を自分の手で守るという性質を持っていたからだそうです。

現代の法や個人の権利は、基本的に当事者主義の裁判によって実現されるものです。そこには、自分の運命を丸ごと他者に委ねないという、決闘のような精神が受け継がれているのかもしれません。私たちは法や権利とどう向き合うべきなのか。『決闘裁判』は、そのヒントを与えてくれる作品です。

自分の運命を
握るのは誰か？



いのちに寄り添う

その人らしく
生きていくために



生命科学科
野崎 宏 先生



『いのちの停車場』
南杏子著 幻冬舎 【請求記号：913.6/Mi37】

医療を学んでいると、病気のしくみや治療法、検査値、技術などに目が向きます。もちろん、それらは医療に関わるうえで欠かせない知識です。一方で、実際の現場で向き合う相手は、病気だけではなく、一人ひとりの生活や家族、思いをもった患者さんです。

『いのちの停車場』は、救命救急の現場で働いてきた医師が、故郷で在宅医療に携わる中で、さまざまな患者さんや家族と出会っていく物語です。病院で命を救う医療とは異なり、在宅医療では、患者さんが残された時間をどのように過ごしたいのかを考える場面が出てきます。医学的に正しいことが、必ずしも本人や家族にとって一番よい選択とは限らないこともあります。

医療や福祉、生命に関わる分野を学ぶ学生にとって、「人を支える」とはどのようなことを考えるきっかけになる一冊だと思います。



看護学科

大西 奈保子 先生



『空、はてしない青』

メリッサ・ダ・コスタ著 講談社 【請求記号：953.7/D11/1～2】

若年性アルツハイマー病と診断された26歳のエミル。有効的な治療法がない中、家族は一縷の望みをかけて臨床試験に参加するように息子エミルを説得するが、エミルは、医学の実験台にされて最期の数年をずっと病室に縛り付けられることを嫌い、家族には何も告げずに最期の旅に出ると決心した。しかし、一人で死ぬのは怖いし不安でもあった。そこで、ネットの掲示板に自分の状況を説明したうえで、一緒に旅をしてくれる人を募り、返信してきたのが若い小柄な女性、ジョアンヌだった。自分のことは話したがらないジョアンヌとピレネー山脈の美しい自然、歴史的な建物、旅での出会いを通じて、2人の関係は徐々に親密になっていく。自分が最期までエミルを見ると約束し、旅の途中でエミルと結婚式を挙げたジョアンヌではあったが、徐々にエミルは愛するジョアンヌのことが認知症の症状によりわからなくなる一方で、ジョアンヌのことを自分の母親だと思うようになる。これは最近の記憶から忘れ、昔の記憶は最期まで残るという認知症の症状でもある。

ジョアンヌは、エミルが妻である自分のことを忘れていく一方で、「ママ」と呼ばれることに対して複雑な思いを抱く。それというのもジョアンヌには障害があって話すことができない息子がおり、その息子は「ママ」と呼ぶことなく事故で逝ってしまったのだ。ジョアンヌは、息子から決して呼ばれることがなかった「ママ」をエミルを通して体現しているのである。

最終盤でジョアンヌは最期まで看するという約束を破って、最期までエミルの記憶に残った「ママ」の腕の中で逝かれるように、それがエミルにとってもエミルの家族にとっても大切なことだと決断する。それが愛する息子を亡くしたジョアンヌの答えであった。

この本は多くの国々で読まれているミリオンセラーの長編小説である。最期まで残る記憶と消えてしまう記憶、どちらの記憶もその人にとっては大切な記憶であるのと同時に、人は、自らの人生や最期をすべて思い通りにはできないし、それが過酷なものであったとしても人との出会いや関係性の中に救いがあり、その人が亡くなった後も遺された人の中に記憶として生き続けられるのだと思う。

最期まで残る記憶と

消える記憶、

そして生き続ける記憶



教育を見つめる

星が見守る
人間への
温かなまなざし



教職センター
佐藤 太 先生



『星の教室』

高田郁著 角川春樹事務所【請求記号：913.6/Ta28】

「学び」とは、誰にも奪われないものを自分の中に蓄えるということなのか。本書が問いかけてくる言葉です。

ある出来事がきっかけで中学校を卒業することができずに二十歳を迎えた主人公が、夜間中学と出会い、再び歩みだす物語。戦争や病気、家庭事情、不登校、外国にルーツをもつ人など様々な事情により十分に義務教育を受けられなかった人々が通ってくる夜間中学。教育機会確保法が整備された今日でも、一千強ある日本の中学校に、夜間中学は僅か69校しかなく、その存在をよく知らない人もいます。

物語は、夜間中学を舞台に仲間や教師との温かな交流、葛藤、学び直しを通して、主人公の心に希望や絆が芽生え、生きる力へと繋がっていく様子が丁寧に描かれています。

本書は、『みをつくし料理帖』など時代小説の名手、高田郁さんの初の現代小説で、学ぶこと、生きることへのメッセージが織り込まれています。私自身も夜間中学で務めた経験があり、当時の光景が鮮やかに蘇り、読後に温かな余韻が残ったお薦めの一冊です。折しも『星の教室』は映画化され、2026年秋に全国で劇場公開される予定です。こちらも楽しみ。

EDUCATION IS NOT
THE FILLING OF A PAIL
BUT THE LIGHTING OF A FIRE



医学教育センター／東京柔道整復学科

古川 雄祐 先生



『沈む日本とカオス化する世界』

内田樹著 SBクリエイティブ 【請求記号：304/U14】

私事で恐縮ですが、本学に採用していただいて3年が過ぎました。前職が研究センターであったため、学生の皆さんに納得していただく講義をするのは本当に難しいと悩んでおります。世代の違いは決定的なので、学生さんの考え方を知ることが、分かりやすい講義につながるのではと思っております。

内田樹氏は大学院でフランス哲学を研究した方ですが、東京都立大学や神戸女学院大学で長く教鞭を取っており、教育に関する論考をネットや書籍でたくさん発表しております。内田氏の主張には賛否両論あると思いますが、個人的には2009年に刊行された『下流志向 学ばない子どもたち 働かない若者たち』（講談社文庫）を読んで衝撃を受け、以来、新刊が出ると目を通すようにしております。同書には今の学生の教育に対するスタンスが以前と全く違うことが具体的に示されており、その原因が経済的価値観の変化によると分析されております。そうしますと、教育も学生の価値観に合わせなくてはならないように思いますが、内田氏はそうではなく教育とはもっとレジリエントなものだと主張されます。

そこで今回紹介する『沈む日本とカオス化する世界』ですが、刊行は2026年2月で、著者が過去1年間にさまざまな媒体に発表した時局についての論考をまとめたものです。テーマは教育・組織論・社会制度・政治経済など多岐にわたっておりますが、第1章で「市民的成熟」が困難になりつつある社会における教育の在り方を論じております。とくに興味深かった論点は、日本における基幹産業の遷移が教育に与えた影響で、農業が中心であった頃は学生が成長してゆく、いわば「別人になること」が教育の理念として当然視されておりました。その象徴的な表現が今では使われなくなった「土別れて3日、すなわちさらに刮目^{かつもく}して相待すべし」であると内田氏は主張します。その後、基幹産業が工業に変わると、人間としては変わらなくても知識の量が増えている状態が知的成長であると考えられるようになりました。このような教育に対する考え方の変化の象徴が、教育課程への工業用語の導入であり、例として「シラバス」・「内部質保証」・「工程管理（PDCAサイクル）」などを挙げております。

このコンテキストで考えますと、現在の基幹産業は国際的にも「情報」になっておりますので、これからの教育はどうあるべきか悩みは尽きないところであります。しかしながら個人的には、現在接している学生さんは昔と比べて本質的にはさほど変わっていないと感じております。内田氏の意見の通り、教育は我々が思っているよりレジリエントなものなのかも知れません。

教育に関する
悩みは尽きない.....
されど



人が育つ「土壌」を 考えさせる一冊



学校教育学科
持田 尚 先生



『冒険する組織のつくりかた
「軍事的世界観」を抜け出す5つの思考法』
安斎勇樹著 テオリア 【請求記号：336.3/A49】

近年、学校教育では「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められています。しかし、主体性を育てようとしているはずなのに、私たちは知らず知らずのうちに「指示する」「評価する」「管理する」という発想へ戻ってしまうことがあります。

本書は、その背景にある考え方を「軍事的世界観」と呼び、人が自ら探究し、互いに価値を創り出す「冒険的世界観」という新しい組織観を示します。私が特に心を動かされたのは、「組織とは機械ではなく生き物である」、そして「全員が自己実現をあきらめない」というメッセージです。一人ひとりの「やってみたい」「挑戦したい」という思いが、組織全体の力へとつながっていく。その象徴として紹介されるのが、『ONE PIECE』の「麦わらの一味」です。仲間たちはそれぞれ異なる夢をもちながら、同じ船で航海を続けます。この比喩は、個人の自己実現と組織への貢献を対立させない本書の発想を、鮮やかに伝えてくれます。

もちろん、そのような組織づくりは簡単ではありません。現実には多様な立場や役割があり、効率や管理も必要です。それでも、人を機械の部品のように扱うだけでは、主体性や創造性を十分に生かすことはできない。本書は、その難しさから目をそらさず、「では、どのような土壌を耕せばよいのか」と問いかけます。

この問いは、教育やスポーツにも通じます。教師やコーチの役割は、子どもや選手を思いどおりに動かすことではなく、自ら考え、挑戦し、試行錯誤を重ねながら、自分自身の可能性を探索できる環境を整えることではないでしょうか。私がゼミ活動や卒業研究で大切にしている「一人ひとりが自分自身の問いを見つける」という教育観とも深く重なりました。

本書は理論を示すだけでなく、後半の実践編に、組織づくりに悩んだときに立ち返れる具体的な視点と方法が豊富に収められています。教育、コーチング、そして人が協働する場に関わる方に、ぜひ手に取っていただきたい一冊です。読み終えた後には、「人を育てる」とは何かだけでなく、「人が育つ場をどう育てるか」という問いが、きっと心に残ることでしょう。

『慶應大学生と学ぶ社会科教育』

コロナ禍におけるオンライン授業の風景』

吉村日出東著 毎日新聞出版 【請求記号：377.15/Y91】

今年、どうしても紹介したいもう一冊があります。『慶應大学生と学ぶ社会科教育—コロナ禍におけるオンライン授業の風景』です。著者の吉村日出東先生は、本学学校教育学科長として教育・研究を牽引され、本年、惜しまれつつご逝去されました。

本書は、一見するとコロナ禍における大学のオンライン授業の実践記録です。しかし、読み進めるほどに見えてくるのは、授業方法の工夫以上に、吉村先生が学生へ届けようとした学びと、その根底にある教育哲学です。先生は新聞記事や時事問題を取り上げ、「自分は社会とどうつながっているのか」「社会の中で何を考え、何を行うのか」を学生に問い続けました。提出されたレポートを一人ひとり丁寧に読み、次の授業で応答する姿からは、学生との対話を授業の中心に据えていたことが伝わってきます。

吉村先生の経歴は、獣医畜産学、考古学、史学、社会科教育学、比較社会文化研究、大学史、道德教育、教員養成へと広がっています。一見すると多岐にわたりますが、それは関心が移ろったのではなく、日本という社会がどのように形づくられ、これからどのような社会になるべきか、そのために教育は何を担うのかという一つの問いに、異なる学問から近づこうとした歩みだったのではないのでしょうか。本学のガイドブックに先生が記した「共生社会にふさわしい教師」という言葉は、その探究の一つの到達点であったように思います。

コロナ禍という未曾有の状況でも、先生は「大学とは何か」「授業とは何か」「学生は何を学ぶべきか」という根本的な問いを手放しませんでした。そして本書の最後には、困難の中でも学生たちは学び続けていたことを知ってほしい、という願いが記されています。

『冒険する組織のつくりかた』が未来の組織と学びを構想する本だとすれば、本書は、その未来を支える教育が、学生への信頼と対話によって生まれることを示す記録です。追悼にとどまらず、一人の教育者が生涯をかけて問い続けた社会と教育へのまなざしを、次の世代へ手渡す一冊として、教員を志す学生、そして教育に携わるすべての方に読んでいただきたいと思います。

社会を問い、
学生を信じた
教育者の記録



文化と表現を楽しむ

作業療法学科
鈴木 幹夫 先生



いろいろな分野の
本を読んで、
こころと脳の奥行きを
広げよう。



『世界で最も美しい12の写本』

『ケルズの書』から『カルミナ・ブラーナ』まで』

クリストファー・デ・ハーメル著 青土社【請求記号：022.23/D51】

『虹の解体 いかにして科学は驚異への扉を開いたか』

リチャード・ドーキンス著 早川書房【請求記号：404/D47】

『砂の器』映画

野村芳太郎監督 松竹株式会社ビデオ事業室【請求記号：778.2/SUN】

『ミス・ペレグリンと奇妙なこどもたち』映画

ティム・バートン監督 Happinet【DVD 所蔵なし】

書物というものの本質は、その重さにある、と私は確信している。すなわち、本を手にした時の、あの、否認のない受容というか、うつむくことのない悲しみといったような、腕にかかるかすかな疲労感である。重力というものは、地球上のすべての存在者に影響を与えているが、普段われわれはそれをほとんど意識しない、あるいはやたらと抗ったりするものだ。ハンプティダンプティは自分が卵であることを知らなかったからあんな高い塀の上に座っていたのだろうか、白の騎士は何度も落馬を繰り返すのになぜなおも馬の上の高みで前のめりの姿勢を保とうとしたのであろうか……。西洋では中世まで、書物といえばほとんど写本であり、おもに修道院などで片手では持てないほどの重さであろう聖書などの写本が制作された。15世紀のグーテンベルクによる活版印刷の実用化が、その後の書物の普及や宗教革命を導き、社会は大きく変わったが、このあたりのことは『グーテンベルクの銀河系』が面白いので興味のある人は読むべきだ。しかしここではあえて中世の写本を賞味したい。かの有名な『ベリー公のいとも美しく時を流す』のフルバージョンを見たいものだが、フランス版は入手が面倒だし、岩波版も絶版なので、ベリー公の時を流すは入っていないが『世界で最も美しい12の写本』をお勧めする。600ページを超える大部な本ではあるが、ほぼ毎ページに写真があり飽きずに読める。

碩学^{せきがく}というのか博才^{はくがくさい}才^{さい}穎^{えい}というのか、一つの専門分野のみならず、広く世界を能動的想像力を携えた眼で視る人たちがいる。例えばゲーテは意外にも『色彩論』というフルバージョンは両手で持たなければ持てないほどの大著を書いており、ニュートン一派の対抗勢力の代表として引用されることが多いし、以前勧めた『もうすぐ絶滅するという紙の書物について』を書いたエーコも多才な人だ。『虹の解体』という題名に惹かれて手にした本は、以前は怖くて読めなかった『神は妄想である』を書いたドーキンスであった。意外にも

➤前半は多くの詩が引用されている本であるが、真の科学と似非科学を峻別し、後者を厳しく糾弾する著者の情熱が伝わるし、著者の博学ぶりはさすがだ。

社会が弱者やマイナーな人たちへの寛容さや包容力を失うと、たいてい世の中はやばい方向へ向かうことは歴史が証明している。悪しき社会ダーウィニズムに毒された若者が津久井湖近くの施設で障害者を何人も殺した事件は記憶に新しい。ハンセン病患者に対する恥ずべき法律が長く続いたことも我が国の医療政策の汚点であるが、映画『砂の器』(1974年)はそのハンセン病を主題にしている。私は読んでいないが原作は松本清張である。昔、映画館を出たのちに、この映画は社会的なことを扱ったのか個人的なことを扱ったのか、そのまま路上で友人と立ったまま1時間も議論したことを思い出す。映画『ミス・ペレグリンと奇妙なこどもたち』は最近の映画だが、こちらも読んでいないが原作は『ハヤブサが守る家』である。映画のほうは、私ははまり役のエヴァ・グリーンの魅力にやられてDVDを買って何回も繰り返し観た。こちらは弱者というより異形の子どもたちを世間の迫害から守っている話である。



こども学科
藤井 志帆 先生



『だっぴ!』

北村直子作 こぐま社 【請求記号：726.6/Ki68】

『ワタナベさん』

北村直子作 偕成社 【請求記号：726.6/Ki68】

子どもたちにとって絵本との出会いは、「言葉」や「音」「リズム」、「絵」を通してさまざまな感性に触れるだけでなく、読み手との間に信頼感や安心感が育まれる大切な時間と空間をもたらしてくれます。

今回紹介するのは、北村直子さんの『だっぴ!』と『ワタナベさん』です。

『だっぴ!』は、さまざまな生き物の脱皮を、リズムカルな言葉とユーモラスな絵で描いた作品。ページをめくる速度や間によって楽しさが一層広がります。

『ワタナベさん』は、おいしい料理を次々と作り出すお鍋が主人公。食欲をそそる料理と、最後のページの温かな余韻が魅力です。

大人が心から楽しむことは、子どもが安心して絵本の世界を受け入れることにつながります。大人のワクワクが子どもたちにも伝わっていくからこそ、まずは読み手自身が「楽しい」「大好き」と思える一冊に出会うことを大切にしてほしいと思います。

子どもとともに
楽しめる
絵本との出会い



落語の喜び
—その瞬間
一緒に生きている
気持ちになれる



教職センター
福田 八重 先生



『あかね^{はなし}噺』

末永裕樹原作、馬上鷹将作画 集英社 【請求記号：726.1/Su18/1〜】

「会って嬉しい、わかれて嬉しい」NHKドラマ『サイレント・プア』では、孫のことをそう表現していた。会ってうれしいのはもちろん、わかれて離れている時間も共に過ごした思い出が喜びをくれる。

私にとっては、学生や院生の存在がそうだ。私は教育学の先生をしている。教職課程の先生だ。教え子は先生になる。もしくは、先生の免許を得て、新たな道を拓く。

私は「問い」を投げかける人であるが、共にいるとき、学生や院生のみんなが、応答してくれた言葉について、授業を終え、わかれた後、今度は自分自身と対峙しながらずっと考え続けることで、人間はもちろん、生き物や自然や様々な物や、ものごとや学校、そして、子どもや教育への見え方が広がっていった。みんなが新たな「問い」をくれるからだ。

私は小さいころから父が遅くまで研究をしている背中が好きだった。父が85歳の今もそれは変わらない。地域づくりの研究者で、そこに住まう人たちが自身が幸せだと思ふ地域を自分たちでつくることを支える研究を続けている。地域の人たちと対話をし、夜を懸けて、ひとりの思索の時間に地域の人たちの表情や言葉と向き合う。

あかね^{はなし}噺は「そこからおっ父の^{はなし}噺を見るのが 私は大好きだった」から始まる。ふすまの隙間から落語の練習をする父を眺めるのが幸せだったのだ。一人で噺しているのにたくさんの人の姿が見える。ところが、あかねが小学生の時、一門の騒動で父は破門となり、落語から引き剥がされる。落語家ではなくなる。

しかし、物語はここから始まる。父の破門後、実はあかねは父の師匠にずっと稽古をつけてもらってきた。そして17歳、出演者の20分の遅刻。小さな出来事をチャンスに変え、見習いの身分であるがはじめて人前で高座をすることを許される。そして、正式に一門の落語家となる。

落語はただ憶えて話し、客がただ聴くものではない。「気働き」を落語家は大切にしており、それは相手を大切に大事に見て、人生を生きてきた一人ひとりが集まってそこにいるという空気感を浴びて、感じて、噺はじめる。

「噺」から、日々を生きる庶民の生活が見え、その喜怒哀楽は今を生きる私たちと重なり、例えば2時間の高座に行くだけで、落語家の生きざまと覚悟を感じ、丹田にひゅっと力が入って、話の世界へ私たちを誘ってくれる瞬間を共にできる。その2時間の中で気づいたら客は泣いたり笑ったりしている。誰かの人生の「おかしみ、かなしみ、おもしろみ」が、自分と重なる。その瞬間を一緒に生きている気持ちにさせてくれる「落語家」として歩み始めた「あかねの物語」一緒に生きてみませんか。

漫画の文法、 のぞいてみませんか



幼児保育学科
富岡 麻由子 先生



『ギガタウン 漫符図譜』
こうの史代著 朝日新聞出版 【請求記号：726.1/Ko76】

漫画を読んでいて、登場人物の顔や目の下にたくさんの縦線が入ったり、しずく型の線が顔や頭上に描かれたりしているとき、私たちはそれを驚愕や絶望、緊張や集中の表れとして違和感なく理解します。本書は、そうした漫画やイラストで用いられる記号表現を体系的に集め、その意味や働きを4コマ漫画とともに解説した、真面目で楽しい、少し変わった本です。

本書を読むと、これまで当たり前を受け入れていた表現上の約束事が前景化され、実は漫画が共有された読み方の上に成り立っていることに気づかれます。このように、私たちの「当たり前」を、少し距離を置いて眺めることは、ときに新しい学びや問いのきっかけになるように思います。漫画が好きな人はもちろん、見慣れた世界を見直してみたい人にも薦めたい一冊です。

幼児保育学科
齋藤 正人 先生

『歌川国芳 遊戯と反骨の奇才絵師』
河出書房新社 【請求記号：721.8/U96】



江戸を彩った奇才・
歌川国芳の魅力

江戸時代後期を代表する浮世絵師・歌川国芳（1798-1861）の作品集を紹介します。豪快な武者絵の名手として知られる国芳ですが、本書では戯画や風刺画などに見られる豊かなユーモアにも焦点を当てています。幕府による出版統制が厳しい時代にあっても、国芳は巧みな見立てや遊び心を作品に織り込み、社会や権力を風刺する独創的な表現を生み出しました。その大胆な構図や斬新なデザインは、現代の漫画やアニメなどのポップカルチャーにも通じる魅力を備えており、多くのクリエイターに影響を与えています。また、作品は江戸の出版文化や庶民の暮らし、人々の価値観を知る手がかりとなり、視覚文化や社会史の視点からも読み解くことができます。

本書には、代表作がオールカラーで多数収録され、作品ごとの解説も充実しているため、浮世絵にはじめて触れる人にも親しみやすい内容となっています。国芳の多彩な作品世界を楽しみながら、時代を超えて受け継がれる江戸文化の魅力に触れることのできる一冊です。



歴史に親しむ

教職センター
仲光 秀城 先生



『真田太平記』

池波正太郎著 新潮社 【請求記号：913.6/134/1～12】

『戦国時代を変えた合戦と城 桶狭間合戦から大坂の陣まで』

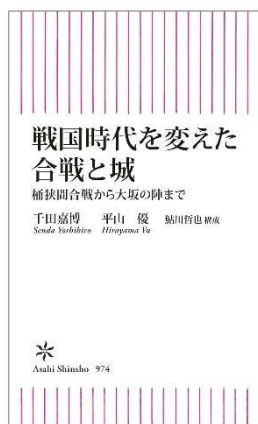
千田嘉博, 平山優著 朝日新聞出版【請求記号：210.47/Se58】

歴史小説を
味わいますか？
最近の最新研究に
触れますか？

私は、毎日のように歴史小説を読み漁っています。今回紹介する1冊は、私が最初に読んだ長編の歴史小説です。草の者（忍者）とのかかわりを通して戦国時代を乗り越えた真田親子を描いた超大作です。自分自身がその時代に入り込んで楽しく読み進められ、読みごたえもたっぷりなので粘り強く読んでいきましょう。

もう1冊は、最近の歴史研究を牽引する二人、城郭考古学者の千田嘉博氏と日本中世史が専門の平山優氏が対談しながら、今までの通説の問題点を指摘していきます。最近の歴史ブームで研究が進んだ新たな史実に触れる楽しさを味わえるでしょう。

この2冊はどちらも戦国時代を扱っています。史実と創作を織り交ぜた長大な歴史小説を選ぶか、歴史研究の最前線の新説に触れるか、どちらを選びますか。両方選んでもいいですね。



アニマルサイエンス学科

近藤 保彦 先生



『普天を我が手に』

奥田英朗著 講談社 【請求記号：913.6/054/1～3】

時は大正 15 年 12 月 25 日深夜、大正天皇の崩御。その日に 4 人の子が生まれます。一人目は東京・麹町の陸軍少佐竹田家の長男、竹田志郎。母は財閥の娘という超エリート家系です。二人目は、石川県金沢の名門侠客（ヤクザ）のところに転がり込んできた妊婦の子。知り合いの社長の妾の子ということで、人情深い矢野親分に拾われ、認知された矢野四郎。三人目は、東京下町で共産党の活動家で先進的な女性雑誌の編集・著者でもある森村と、その同棲相手との間に生まれた森村ノラ。女性の新しい生き方を求める森村は、自分ひとりで娘を育てていこうと決心します。四人目は、満州でジャズのトランペッター兼興行師を父として生まれた五十嵐満。日露戦争後の大連は、中国人（満州族・漢民族）、ロシア人、西洋人、そして日本人が暮らす人種のるつぼです。それぞれが大正から昭和に移ったまさにその時に生を受けるところから、物語が始まります。そして物語は、この 4 人の子の人生が交互に、独立して語られながら進んでいきます。

第一部は太平洋戦争開戦までの、4 人の子供たちの幼少時代。むしろ主人公は、彼らの親たちになります。竹田家は上流階級ですので外国人との交流もあり、志郎も学習院に通うエリート少年として育ちます。金沢の四郎は、父とは血は繋がっていないものの、腕っぷしは強く、しかも勉強も優秀。次第に父に認められ、父親の活動（共産党系の労働組合の活動つぶし）を目にするようになります。母子家庭の森村は、やはり子供の世話が負担となり、ノラは一時的に京都の妹夫婦に預けられます。森村は新しい女性の生き方に関する執筆活動で次第に有名となり、特高に監視されることになります。満州の満は、父が経営するダンスホールでバンドメンバーにも可愛がられ、満自身もタップダンスで舞台に立つようになります。父がアメリカのジャズバンドを招致するなど、満自身もエンターテインメントに傾倒していきます。

第二部は、第二次世界大戦への突入から終戦までです。4 人の子供たちは激動の時代の中で奮闘し、所々で接点を持つことになります。そして第三部では、戦後から高度成長期の日本へ。戦争の廃墟から立ち上がり、大人になった 4 人の活躍が始まります。

皆さんのおじいちゃん、おばあちゃんがどのような時代を生きてきたのか、想像してみませんか。

ページをめくれば
昭和の真っ只中。
激動の時代の
人生を追体験



教職センター
稲川 健太郎 先生



「カズイスチカ」

『山椒大夫・高瀬舟』収録

森鷗外著 新潮社 【請求記号：913.6/Mo45】

千住キャンパス 7 号館から徒歩十分弱くらいの千住中居町公園にある「大正記念道碑」(写真上)は、撰文森鷗外である。漢文の文面ははっきりわかるが、「文学博士 森林太郎」は幾分見づらくなっている(解説看板もあります)。碑文末のところに「千住はかつて父が住んでいたなじみのある所なので、断り切れず」云々旨とある。そう、鷗外の父森静男はかつて北千住で「橋井堂医院」という——今でいう——クリニックを開業していたのだ。現在、“タワマン”の「千住ザ・タワー」敷地内に「森鷗外旧居 橋井堂医院跡」の碑(写真下)が建てられている。

こここそ、19 歳で東大医学部を卒業して医師免許を得た森林太郎がドイツ留学から帰国して結婚するまでを過ごした地である。

「お父さん、わたくしも大分理屈丈は覚えました。少しお手伝いませうか。」ということで「病人をちよいちよい見るやうになつた」青年医師林太郎が、のちに森鷗外として往年の医療活動を材料としてものした小説が「カズイスチカ」である。

カズイスチカ Casuistica は羅典語で臨床記録。医学小説ではあるが発表年が明治 44 年(1911 年)であることに注意しよう。この小説では三症例が述べられている。落架風、一枚板、そして生理的腫瘍である(何の症例であるかは、本文を読んでみよう)。さらに、江戸時代から医師を生業としている老医師やそのクリニックの描写もあり、当時の医院の佇まいや医療従事者の様子、また時代を超えた医師の姿やそれについての青年医師の思いなどもしっかりと書かれている。将来、医療に従事しようとしている学生にとって——パラメディカルであっても、動物医療であっても——、いろいろと考える材料がここにはある。医療“界隈”の物語としての面白さと医療人の生き方について考える材料との両方を与えてくれる逸品である。読むべし、森鷗外「カズイスチカ」。

さて、町屋あるいは北千住から地下鉄千代田線で千駄木まで行き、団子坂を上ると数分で鷗外の旧居「観潮楼」跡地に建つ「文京区立森鷗外記念館」に着く。見学後は館内のカフェで「三人冗語の石」を眺めながら、鷗外の本を読んでもみるのも趣があって面白い。学校帰りに行ってみたらどうであろうか。

尚、本稿では「鷗」が環境依存文字のため略字「鷗」を用いた。

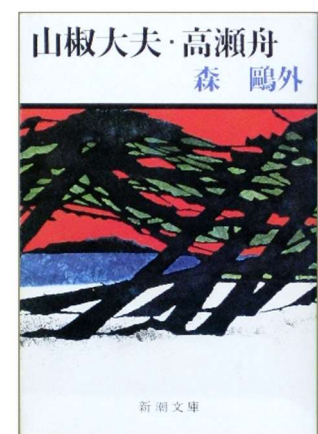
鷗外を片手に 千住界隈を歩こう



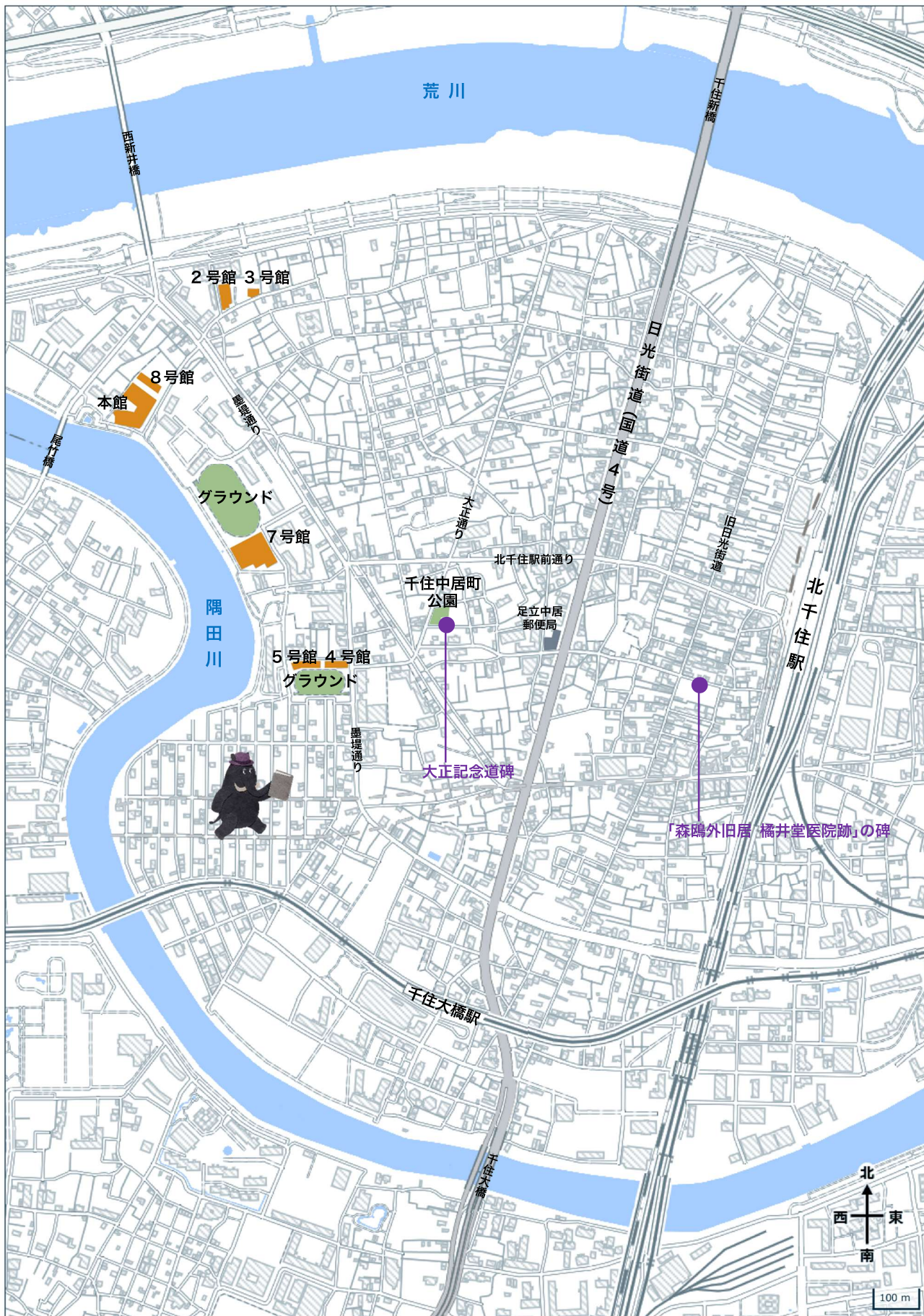
大正記念道碑
(稲川撮影)



「森鷗外旧居 橋井堂医院跡」の碑
(稲川撮影)



千住キャンパス周辺地図



(国土地理院の地理院地図 Vector を加工して作成)

